別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

2023年　5月　1日

氏名　　井上　顕子　　印

研究分野	研究内容のキーワード
重篤・救急看護に関する実務	重篤・救急看護、周手術期看護、災害看護、臨床倫理、継続教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 (1) 杏林大学保健学部看護学科非常勤講師	平成21年9月	大学2年生、3年生の急性期看護の実習指導教員としてそれぞれ10名の学生を計４週間指導。学生が主体的に取り組めるように、実施した援助に対して学生自身で評価し、共に振り返ることで、次の援助に活かせるように指導した。また、学生が修得した知識と臨床が結びつくように、患者での現象を具体的に解説しながら、リアルタイムで教科書と照らし合わせるという方法で指導した。また、看護の楽しさを感じ取れるように、活き活きと患者と接している看護師として自分の姿をみせた。
(2) 北里大学ティーチングアシスタント	平成24年5月 （6時間）	基礎看護技術の指導の際は、教科書での基本に則りながら、実際の臨床場面がイメージしやすいように、臨床現場に近い環境を作ったり、様々なシチュエーションを想定しながら演習をおこなった。また、救命救急センターへ見学実習の教員として参加した際は、学生が修得した知識と臨床が結びつくように、看護師と共に患者の援助を行い、その場で看護師がとった行動の意味を看護師自身に説明してもらえるよう働きかけたり、自分の考えや判断を話すなど工夫した。
(3) ヘルスアセスメント教育における視覚教材の活用	令和2年7月30日	常磐大学2年生90名を対象とした「ヘルスアセスメントⅠ」の科目において、授業が臨床と結びつくように工夫した2種類の動画を作成した。1つは、ヘルスイグザミネーションの手技が実際にイメージできるように実施者目線で手技が確認できる動画、もう1つは実際のヘルスイグザミネーションの活用方法がわかるように、患者の症状を再現し、患者役とヘルスイグザミネーション実施者両者を観察できる全体の場面を撮影した動画である。授業後、学生から理解しやすかったとの高評価を得た。
(4) 臨地実習の代替としての模擬実習	令和3年1月18日～2月5日	コロナ禍により臨地実習が中止になったため、学内実習においても臨地実習に近い経験や看護が学べるように、ペーパーペイシェントで看護展開をし、看護計画立案後は実際に教員や学生を模擬患者として、看護援助を実施する方法で行った。患者役から看護師役の学生へのフィードバックにより、臨地実習では得られない介入に対する率直な感想や意見が聞かれ、学びを深めることができた。
2　作成した教科書，教材 (1)術後患者の事例	令和2年7月	周手術期の演習で、胃がん患者の術後の事例を作成し、講義、演習で使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		

4　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）看護学校の実習指導	平成26年～令和2年	看護学校2校（北多摩看護専門学校、府中看護専門学校）の看護学生に対し、救命救急センターの概要や看護について指導。実践されている看護の説明だけでなく、日本の救急医療の現状理解のために、ニュースで取り上げられている内容等を説明に組み込みながら、医師や外来看護師、救急隊等の他職種との協働にも参加できるように指導した。
（2）救急看護認定看護師教育課程研修生への実習指導	令和元年12月～令和2年3月	東海大学看護師キャリア支援センターの救急看護認定看護師教育課程研修生2名に対し計5週間、看護実践における看護過程と教育に関して指導。スペシャリストとして、患者の病態の理解や看護介入の方法等を追究できるように、多種多様な質問をする方法で指導した。また、スペシャリストとしての考え方やふるまいについて自らの考えや信念、方法を伝えた。
5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
看護師	平成5年5月10日	免許番号：第795232号
保健師	平成24年4月26日	免許番号：第208251号
急性・重症患者看護専門看護師	平成27年11月28日	認定番号：第1706号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）東京都立多摩総合医療センター院内教育講師	平成27年4月～令和2年3月	1～3年目の看護師約100名/年を対象とした、フィジカルアセスメント、急変時の対応、看護倫理、臨床倫理に関する研修講師を行い、看護師の育成に携わった。
（2）近隣施設への学習会講師	平成27年4月～令和2年3月	近隣の病院（府中医王病院、至誠会第二病院等）、訪問看護ステーション（わそら街なか訪問看護ステーション等）へフィジカルアセスメント、救急対応、重症患者の看護、臨床倫理等の講義を行い、地域の看護の質向上を目指した。
（3）東京都立多摩総合医療センター倫理コンサルテーションチームの開発と活動	平成27年6月～令和2年3月	院内の多職種から構成される倫理委員会の一員として、その下部組織である倫理コンサルテーションチームを組織し、倫理的な課題の発生時に即時に対応できるシステムを構築した。また、チームの一員としても参加し、多職種と協働しながら倫理カンファレンスのファシリテーターを行い課題の解決を図るとともに、チームの取りまとめを行った。
（4）東京都立多摩総合医療センター急変対応院内認定看護師制度の開発と育成	平成30年6月～令和2年3月	院内の急変対応力の向上を目指し、スタッフ教育が可能な急変に特化した看護師を各病棟に配置するため、「急変対応院内認定看護師養成研修」を企画、運営した。毎年約10名の修了生が誕生した。研修を修了した看護師の人数が増え、各病棟に配置されたことで、病棟スタッフへの急変に関する教育が活発となった。また、急変対応院内認定看護師の育成とフォローアップにも携わった。
（5）都立病院エキスパートナース養成研修講師	令和元年度	都立の5病院全体の救急看護のスキルアップのために、東京都が主催している「救急看護エキスパートナース育成研修」の研修講師として重症患者の家族看護、授業設計の講義を約15名に対し行った。研修修了後、即座に役立つ実践的な内容にするために、研修生が実際に困難と感じた事例をもとに、講義を組み立てた。

(6) 東京都立多摩総合医療センター看護師主体の院内救急対応システム（Rapid Response System:RRS）の開発と活動	令和元年度	外来や一般病棟入院中の患者が心停止に至る前に医療的介入を行い、予後の改善を図るために、看護師主体のRRSを開発し、メンバーとしても活動した。看護師を主体としたことで、相談しやすい利点から、病棟看護師が躊躇なくシステムを作動することができ、また、診療科を越えて円滑に、より早く医療介入ができた。
(7) 令和元年度厚生労働省委託事業「人生の最終段階における医療体制整備事業」患者の意向を尊重した意思決定のための相談員研修におけるファシリテーター	平成32年1月5日	「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」に則り、人生の最終段階で患者の意思が尊重される環境を資することを目的とする研修のファシリテーターを行った。
(8) 第2回気道管理学会学術集会　セミナー演者	平成32年1月19日	「病棟における気道管理の実例」をテーマに、人工気道に関する看護に関して学会で講演した。
4　その他 実務家としての卓越性 1.　専門看護師（急性・重症患者看護）としての活動に関する事項 (1) 困難事例への看護実践	平成27年11月～令和2年3月	救命救急センターで日々患者の看護に携わっている中で、ECMOや人工呼吸器等の医療機器の管理や医療機器に依存し生命を維持している危機的状況の患者やその家族等の困難事例を総数約40件以上受け持った。特に、人工呼吸器離脱困難な患者の早期離脱を目指すリハビリテーションの計画や患者の病状の受け入れ困難な家族への対応、入院患者の早期リハビリテーションの導入等、患者と家族のQOLの向上を目指し、病院内を横断的に活動した。
(2) コンサルテーションと体制づくり	平成27年11月～令和2年3月	自部署、他部署の看護師や医師、リハビリ関連の医療者から総数約60件の相談を受けた。家族対応困難の事例が多く、家族への面談、病状説明への同席、看護倫理カンファレンスの開催等をおこない解決に努め、コンサルティが自ら解決できるような体制づくりを行った。また、管理者からの依頼では、組織のニーズ分析を行い、システムの構築や制度の開発を行った。
(3) 調整	平成27年11月～令和2年3月	総数約16件の調整を行った。救急搬送された患者の退院調整、診療科間の調整が多く、部署横断的に活動した。
(4) 倫理調整	平成27年11月～令和2年3月	集中学的治療の撤退の是非等、自部署で問題となる倫理調整だけでなく、倫理コンサルテーションのメンバーとして病院内を横断的に活動し、依頼時は倫理カンファレンスを開催し問題解決に尽力した。総数約40件の調整を行った。
(5) 教育	平成27年11月～令和2年3月	1～3年目までの院内教育、4年目以降の急変に関する教育、他施設への講義等、総数約40件の勉強会と、ECMO等の医療機器の管理や看護、臨床倫理等、他部署や医師からの依頼に対する学習会を行い、講師として教育に従事した。
2.　災害看護活動に関する事項 (1) 東京DMATの活動	平成16年8月～令和2年3月	大規模交通事故等の都市型災害時に、東京都保健福祉局や東京消防庁からの要請により、災害現場での医療処置を行い救命活動に尽力した。また、地域の大規模災害訓練やエマルゴ研修に参加し、地域との連携の強化を図った。
(2) 熊本地震の医療救護班の活動	平成28年5月7日～5月11日	熊本地震から約3週間後の亜急性期に、被災地で勤務する医療従事者のレスパイトのために、阿蘇医療センターで救急外来看護に従事した。他県からの医療者と協働し、救急搬送される患者のケアを行った。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 整形外科ビジュアルナーシング	共著	平成27年4月5日	学研メディカル秀潤社	本書は整形外科的疾患に携わる看護師向けに豊富な写真とイラストを用いて解説した実践的なガイドブックである。 分担課題1：「第4章,整形外科の患者の全体像」(p83-86) 患者のニードとその援助を解説した。分担課題2：「第5章,保存療法におけるケア:安静」(p89-90)安静時の援助を解説した。分担課題3：「救急処置におけるケア:外傷処置とケア」(p147-152)外傷の初期診療や管理を解説した。 共著者：近藤泰児,畑田みゆき,吉富洋樹・井上顕子他34名
（学術論文） 1. 救命救急センターへ配置転換した中堅看護師の体験に関する研究―看護師としてのアイデンティティ再編に焦点をあてて―（修士論文）	単著	平成26年3月	北里大学大学院	救命救急センターへ配置転換した中堅看護師の体験を明らかにする目的で、14名の対象者にインタビューを行い質的記述的に分析した。その結果、看護師の様々な体験は、看護師としてのアイデンティティが再編するプロセスを表し、段階毎での支援が必要であることが示唆された。
「資料」 2.A病院における「急変対応院内認定看護師養成コース」研修プログラム作成の試み―研修終了後の急変対応に関する自己の意識の変化からの評価をふまえて―（査読付）	共著	平成33年3月15日	常磐大学看護学研究雑誌第3巻（pp.71～78）	A病院における急変対応院内認定看護師養成研修が受講者に及ぼす影響を明らかにする目的で、10名の看護師にインタビューを行い質的記述的に分析した。その結果、急変対応院内認定看護師として期待される役割を遂行している一方で，役割遂行のための困難感を認識しており、今後必要な支援内容の具体化につなげる結果が得られた。 共著者：井上顕子、黒田暢子 本人担当分：研究代表者として総括、分析、まとめを担当
「資料」 3.高齢者への生活史インタビュー体験が看護学生にもたらす学習効果（査読付）	共著	平成34年3月31日	常磐大学看護学研究雑誌第4巻（pp.23～31）	高齢者への生活史インタビュー体験の学びを明らかにする目的で、学生の振り返りの記述を研究対象とし、質的に分析した。その結果、高齢者に対する生活史インタビュー体験は、看護学生の高齢者理解を促進し、老年看護実践への示唆を得る学習方法として効果的であった。 共著者：菅原直美、黒田暢子、井上顕子 本人担当分：データ分析、原稿校正、研究プロセス全体の助言を行った。
（その他） 「総説等」 1. 震度7の現場で―熊本地震の復旧レポート―	単著	平成28年7月15日	都政新報	熊本地震の後に医療救護班として南阿蘇にある中核病院で、被災者である職員のレスパイトの目的で勤務。全国から派遣された医療チームと合同でERに来院したWalk inの救急患者と救急車搬送患者に対し医療を提供した。他の医療チームと合同での活動であったため、エラーが起こらないようにコミュニケーションを密にとり、入院の可能性のある患者に対しては、指揮系統を南阿蘇の病院の医師に統一し病棟へ繋げる等の工夫をおこなった。

「学会発表」 1.救命救急センターへ配置転換した中堅看護師の体験に関する研究	―	平成26年5月24日	第10回日本クリティカルケア看護学会 （名古屋）	一般病棟から救命救急センターへ配置転換した中堅看護師の体験を明らかにする目的で、14名の対象者にインタビューを行い質的記述的に分析をおこなった。その結果、一時的に看護師としてのアイデンティティは低下するが、それを処理することでアイデンティティを精一杯維持し、再編するプロセスを辿ていた。配置転換した中堅看護師には段階毎での支援が必要であることが示唆された。
2.病棟地図を記載したアクションカードの作成―誰でも、早く、確実に―	―	2018年8月11日	第20回日本災害看護学会 （神戸）	視覚的に記した地図主体の災害時アクションカードの有効性を明らかにする目的で、8回の災害訓練を実施し、時間、点検の確実性、最短経路の選択を、文字主体のアクションカードと比較した。その結果、地図主体のアクションカードは文字主体より、短時間で確実にタスクが実行されていた。配属直後や地図が苦手な人でも即座に理解できるように、改良を加えていく必要はある。 共同発表者：木本雅人、白井翔太、清水若葉、井上顕子
3.褥瘡発生リスクが高い救命救急センター入院患者における体位変換方法の検討―スモールチェンジ法による除圧の効果―	―	平成30年9月7日	第49回日本看護学会-急性期看護-学術集会 （別府）	身体の一部に介入するスモールチェンジ法の有効性を明らかにする目的で、11名の対象者に対して、身体を大きく移動する体位変換と体圧を比較した。その結果、褥瘡好発部位全てにおいて体圧の差はなく、組織の不可逆的な血流障害は回避されていた。体位変換をすることで循環動態に変動をきたす重症患者の褥瘡予防にスモールチェンジ法は有効である可能性が示唆された。 共同発表者：矢野真理子、鍼田慎平、井上顕子
4.看護師による鎮痛スケールを用いた評価－BPSとCPOT-Jの比較－	―	平成30年9月7日	第49回日本看護学会-急性期看護-学術集会 （別府）	鎮痛評価の容易性を明らかにすることを目的に、48名の看護師を対象にBPSとCPOT-Jを比較した。その結果、評価の容易さ、状態把握のしやすさにBPSに有意差が認められた。 共同発表者：境奈美江、井上顕子
5.救命救急センター看護師の「終末期医療への移行」の方針決定参画を促進するための課題	―	2018年10月20日	第20回日本救急看護学会 （和歌山）	救命救急センター看護師の「終末期医療への移行」の方針決定参画を促進するための課題を明らかにする目的で、7名の看護師にインタビューを行い、質的記述的に分析した。方針決定の参画を消極的にする7つの要因から、看護チームの方向性を示し、家族との時間がとれるような業務のフォロー体制や、情報共有のディスカッションの場の活性化、終末期ケアの教育体制の整備が課題として挙げられた。 共同発表者：林恵美、井上顕子

6.鼻腔から気管吸引を選択する看護師の臨床判断	―	2018年10月20日	第20回日本救急看護学会 （和歌山）	鼻腔からの気管吸引を選択する際の看護師の臨床判断を明らかにする目的で、実践に卓越した看護師9名にインタビューを行い、質的記述的に分析した。その結果、吸引を避けるための手段実施後も気道浄化が図れない場合に、患者の状態やリスクとベネフィットを比較し、利益がある場合に鼻腔からの気管吸引を選択していた。同時に吸引の頻度や期間により吸引の限界を感じ、先の患者の状態を予測していた。 共同発表者：成田裕介、井上顕子
7.院内急変に対する取り組み―急変対応院内認定看護師制度の導入―	―	令和元年10月24日	第58回全国自治体病院学会 （徳島）	院内の急変対応力の強化を目指すため、急変に特化した急変対応院内認定看護師の養成を試みた。研修生へのアンケートとインタビューの結果、シミュレーションを多く取り入れた養成研修の満足度は高かったが、研修終了後は、各部署において院内認定看護師としての活動には至っていなかった。院内認定看護師の資格取得後も支援が必要であることが明らかになった。
8.急変対応院内認定看護師取得後の一般病棟看護師の変化	―	平成32年3月6日	第47回日本集中治療医学会 （WEB）	急変に特化した急変対応院内認定看護師となった、一般病棟の看護師の変化を明らかにする目的で、11名の看護師にインタビューを行い質的記述的に分析した。その結果、滅多に遭遇しない急変対応のスキル維持の難しさや、院内認定としての役割の重圧など、困難感を感じながらも、日々の看護実践の中で、急変に関するリーダー的役割を遂行しながら、自己の課題を見出すなど看護師としてのスキルアップに繋げていた。